

子どもの心をとらえる

広島大学総合科学部教授 上里 一郎

子どもの心をとらえる、子どもを「理解する」ことの大切さは教育の世界ではいつでも語られる課題である。しかし、これは意外に難しいもので、理解しようと努めれば努めるほどかえって遠くなってしまふことが多いようである。子どもとのつきあいのなかから私が、自然に自戒するようになったことは次の4点である。

〈子どもの動きを待つ〉 こちらから質問したり検査したり指導したりという働きかけを最小限にとどめ、相手が動くのをひたすら待つのである。時間はかかるが結果としてはこれが正道のようである。相手が動きはじめたら迅速に誠実にそれに対応する。

〈行動は心の表現である〉 子どもの行動を外側から客観的にだけ見ているのは子どもの願い、葛藤、考えていることは見えてこない。乱暴したり、反抗したりして親や教師に背をむける子どもの姿に、助けてほしい、手をさしのべてほしいという求めを、心を感じる事が大切であろう。それではじめて、「憎しみ」としか見えない形でしか行動（表現）で

きない子どもの心が見えてくる。また、自分が子どもとどのようにかかわろうとするのか、自分の生き方によって子どもの見え方は異なってくる。

〈子どもの眼から世界をみる〉 大人が子どもの心がよく見えないのはむしろ当然であろう。年齢も違えば、視点も異なるからである。大切なことはお互いが理解できにくいことがあることを認識することから始めることであろう。自分の眼から見て当たり前のことを相手も当たり前だと思うと判断しないことである。相手にはそれぞれ独自の見方や世界があることを認め尊重すること、その子の眼から世界を見ることに心がけたいものである。

〈子どもとともに〉 子どもを観察対象者とみるのではなく、同じレベル、目線を追ってファミコンをやり泥あそびをする。一緒にあそび、考え、生活を共にするのである。加えて、子どもを「理解する」ことは、単に技術ではなく、私たちに子どもを「愛する」心が、子どもに学ぶ心があることが前提のようである。

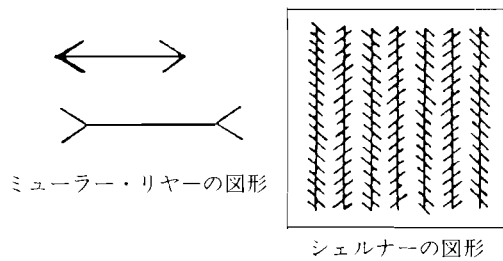
特集 / 教師と子どもの人間関係

教師と生徒の人間関係

広島市教育センター指導主事 長谷川尚徹

1 教師の目

次の図形は、心理学でよく見かける幾何学的錯視図である。平行に並んでいる2本の横線は同じ長さであり、枠のなかの幾本かの縦線は平行に並んだ線であるのに、長さが違ったり、平行でないように見えるから不思議である。



教師が生徒とより良い人間関係を持つようにする時も、教師の一方的な見方や思い込みが大きな落とし穴になることがある。

2 心の交流

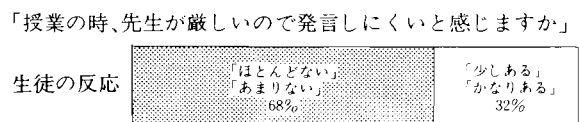
教師と生徒の関係で、教師の一方的な思いだけでは受容しているとは言えない。「この生徒を受容しながら指導に努めた」ということをよく聞くが、これだけではなんともいえない。生徒もそう感じたという反応があってこそ「心が通じた」と言えるのではないだろうか。

本教育センターでは、昭和62～63年度の2年間で、「教師と生徒の人間関係」というテーマで教師の姿勢や生徒の受容等についての研究に取り組んだ。この研究の中で、教師と生徒の人間関係についての意識を生徒と教師の両者の立場から調査した。

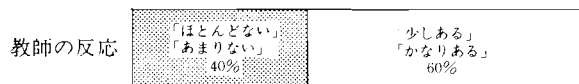
その結果、教師と生徒の意識の一致点や相違点を考察する中からいくつかの課題をとらえた。その一例を示すと次のようなものがある。

3 教師と生徒の意識

「授業の時、先生が厳しいので発言しにくいと感じるか」といった質問に対して、「ほとんどない」「あまりない」と答えている生徒が68%、それに対して教師の60%は生徒に厳しい教師ととらえられていると思っている。



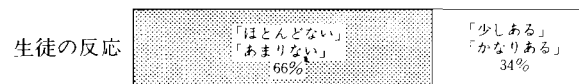
「授業の時、先生が厳しいので発言しにくいと感じていてと思いますか」



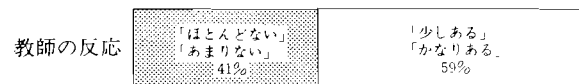
これは教師が自分の授業は生徒にとって堅苦しく、厳しいものと受け止められていると感じており、一方、生徒はそれほどには感じていないことであろう。

同じように「先生が怖いので本当の気持ちと言えなかったことがありますか」といった質問に対して、生徒の66%は「ほとんどない」「あまりない」と答えている。それに対して59%の教師は生徒に怖い教師ととらえられていると思っている。

「先生が怖いので本当の気持ちと言えなかったことがありますか」



「先生が怖いので本当の気持ちと言えないと感じていてと思いますか」



4 生徒指導事例

次に、教師と生徒の意識の違いを認識することにより、教師が生徒に対する理解を深めた事例を紹介する。

(1) 教師は生徒から拒否されていると思っていたが、生徒は逆に教師から受容されていた

ると感じていた事例

対象生徒、中学校2年生、男子

この生徒は人懐っこい性格で友人は多い。しかし、落ち着きがなく、集中力に欠けるため授業中、近くにいる生徒の学習を邪魔するなどしてトラブルを起こすこともある。

生活面においては、家庭が面白くないようで近所に住む祖父母のところにいることが多い。

教師はこの生徒の学習態度を改めさせようとして指導を続けてきたが、あまり改善の兆しが見られない。これは、この生徒が教師に対して拒否的な感情を抱いているのではないかと教師が判断していたからであろう。

しかし、調査してみると、この生徒はそのようには感じてないことが分かった。自分の悪いところには気づいているが、なかなか改善できない。それを教師が何とかしようとしてくれていることを理解していた。

この事例からは、教師は生徒に対して悪いところを指摘すべきは指摘する。しかし、生徒は自分の悪いところに気づいていることを考慮に入れ、多くは言わないようにする。生徒の内面を理解し、家庭内での存在感が薄く情緒面でも満たされない状況等も考慮に入れ、より一層受容的な態度で接することが大切であろう。

問題行動の背景には、家庭内の満たされない人間関係が学校生活にあらわれることがある。教師はその背景を十分理解して生徒を見守る必要がある。

(2) 教師は生徒との関係を良好ととらえていたため、生徒の内面的反応を確かめることのないかわり方をしていた事例

対象生徒、高等学校3年生、男子

学力的には自信を持っているが、温厚でやや気弱な面がある。しかし、納得したことには積極的に取り組み最後までやりとげる粘り強さを持っているので学級内はもと

より、教師の信望も厚い生徒である。授業中は教師の質問や要求に対して素直に、しかも積極的な反応を示す。教師は授業の進め方等に全面的に納得しているものと思っていたが、調査してみると、教師のかかわりを教師が思っているほど良好とは受け止めていないことが分かった。

この事例から、教師は生徒が表す肯定的な言動に安心して、教師のかかわりを怠りやすくなる。そのため内面的なこころの動きがとらえにくくなることが分かった。

教師に対して肯定的な態度をとる生徒が必ずしも、全ての面で満足しているとは限らない。生徒は教師の働きかけを待ち望んでいる場合もある。教師はややもすると手のかかる生徒に視線がいきやすく、手のかからない生徒は見過ごしやすい。

5 生徒の真の姿

教師と生徒の意識の調査では、両者の意識に幾分のズレがみられた。ただ、生徒は教師に対して、それほど拒否的には感じていないのに、教師は自分の指導が生徒に拒否的に受け止められていると感じたケースが多かった。

教師と生徒の意識のズレの原因のひとつとして、生徒の自己表現の不十分さが考えられる。教師に受容されているという意識は十分ありながら、生徒はそれを積極的に表現しようとしないうえ、教師に生徒の思いが伝わっていないものと思われる。しかし、教師は生徒とのコミュニケーションを深め、日々の活動の中で生徒の小さな反応をも鋭くキャッチする感性を磨く必要がある。

冒頭に述べたように、生徒の行動に対して、教師が先入観や偏った見方を持つようになると、生徒の本物の姿は見えにくくなる。

教師が生徒と同じ目の高さで接することにより、生徒の気持ちを理解しやすくなる。このような教師はいつまでも生徒の気持ちが理解できる教師である。

特集 教師と子どもの人間関係

教師と子どもの人間関係を築く

子どもは、家族・友達・教師など彼らを取りまく様々な人との関係の中で生活している。これらの関係が子どもの発達に大きく関わることは言うまでもない。特に、教師は子どもとの良好な人間関係を築く努力、そして同時に、こわさない努力が必要である。

教育センターで行われた『教師と子どもの人間関係』についての共同研究に参加し、教師との人間関係が「良好」、「普通」、「改善を要する」と思われる子ども達に調査をした。その中で、私が服装などについてしばしば注意をする子ども、つまり、私としてはあまり人間関係が良好でないと思っていた子どもの回答には、予想とは大きく違う点があった。それは、彼らが管理的なものよりも、受容的なものを感じており、そんなに人間関係が悪いとは思っていないように答えている点である。これは、休憩時間や掃除時間など、いろいろな場面で彼らと、友達、家族、クラブ活動のことなどについて自由に話をしているからではないかと思う。もし、このような会話がないうちに指導をしていたとしたら、子どもはこのような回答はしなかったのではないだろうか。

信頼される教師であること

良好な人間関係は、子どもの教師への信頼からできるもので、その信頼は教師の「子どもへの思い」と、「日々の実践」から生ずるものである。

一人ひとりの子どもを大切にしようという思いを持つとするなら、子どもの人格を認め、『受け入れること』が必要ではないだろうか。悩み、苦しんでいる子どもに対し、どこまでその子の気持ちを理解しようと努力するか。その努力がみえたとき、子どもは教師

広島市立安西中学校教諭 香川 豊志
を信頼するのではないだろうか。

次に、教師が子どもにどんな人間になって欲しいのかというめざす子ども像を持つとき、それは『求めること』として、彼らに提示されるであろう。たとえば、「人権を守る人になって欲しい」など。そして、そのめざす子ども像が日々の実践にあらわれ、子どももその実践を認めている場合、それも教師への大きな信頼となるのではないだろうか。

『受け入れること』と『求めること』

教師が子どもに接する場合、この2つの姿勢のバランスをうまくとる必要がある。『受け入れること』ばかりにウエイトをおいていると、子どものわがままを助長し、子どもにとって「甘いだけの教師」になり、規律がなくなってしまう恐れがあるし、逆に『求めること』ばかりにウエイトをおいていると「厳しいだけの教師」になり、子どもは反発するか、自発的な行動ができなくなる恐れがある。以上のことをまとめると、次のような図に示すことができる。

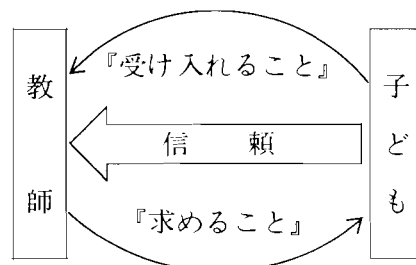


図 教師と子どもの人間関係

しかし、実際には一人ひとりの子どもの性格は違うし、また、家族、友達などとの関係によって、教師との関係も左右されることが多い。やはり、できるだけ多く子どもの声に耳を傾ける努力をしなければならないのではないだろうか。

特集 教師と子どもの人間関係

＝ 教育相談室から ＝

Q おこたえします A

担任に反抗する生徒

Q 中学2年生の1学期までは目立たないおとなしい生徒だったA君に、2学期頃から服装や態度に気にかかることが目につくようになり、注意することが多くなってきました。

私の注意に対して、少しずつ反抗的な態度を示すようになるとともに学級の仲間からも離れ、授業が始まっても他の学級の生徒と外でウロウロし、教室になかなか入ってこないようになりました。どのように指導したらよいでしょうか。

A A君に対する担任の指導の2つの事例を取り上げ、A君と担任の言い分を対比してみます。

【事例1】A君：少し頭痛がするので保健室にいかせてくださいと言うと、少しぐらいがまんできるだろう、もっとまじめにやれと言われ、保健室に行かせてもらえなかった。まじめにやっている者には、そんなことを言わない。同じように頭痛がしても、ぼくには厳しい。

担任：何事にも根気がなく、すぐ怠けようとする。甘くしていると、ますます勝手なことをする。少しでも耐性をつけていくにはある程度厳しく指導しないとだめだ。

【事例2】A君：夢中で遊んでいて教室に入るのが少し遅れた。教室では先生がみんなに、Aが入ってこないと言われ、授業は始められん、みんなで何とかしろと言われた。遅れたが急いで教室に入ろうとしたとき、2人の女子が呼びにきた。みんなが待っているから早く入って来いと言った。ほっといてくれればいい

のに、いちいちみんなで騒ぎたてるようになるので腹がたってわざとゆっくりした。

担任：A君は学級の仲間に対して疎外感を持っている。そのことを考えて、A君にもみんなにも仲間意識を育て、お互いに助け合う仲間づくりをしていきたいと考えて指導した。

中学生になると、思っていることや感じていることが複雑で、しかもデリケートになってきます。ですから、表すことばや行動の背景も複雑になってきますが、自己表現は不器用です。自分にとっても自信がなかったり、周囲を気にしたりして、かえって相手にうまく意思が通じないことが多いのです。このことがきっかけになって、教師と生徒の気持ちのすれ違いが起こってくるのです。

教師は、生徒のサインを読み取り、安心して自己主張できるような援助指導が必要になってきます。

A君が自信なくあいまいな態度を示すことが多くなるにつれて、教師から見れば、根気がなく怠けた態度に見えるようになってきたようです。そうした目でA君を注意するために、A君の教師に対する信頼感は失われていき、反抗的な行動が助長されたようです。

こうした時期には、教師としては、次のような姿勢が必要になってきます。

- どの生徒にも公平に接すること
- 生徒の言動を受容すること
- 生徒に考える間を与えるように教師が待つゆとりを持つこと

生徒の声にちょっと耳を傾けるゆとりが、ぜひ必要です。

広島市教育センター主任指導主事 宮河 治

教育センターひろば

教員特別研修生

今年度前期は次の5名の先生方が、それぞれの専門分野で研修を進めておられます。

*国語科教育：竹中宏昌教諭（古田小）

研修題目：知的感動に導く説明文の指導法に関する研究

*理科教育：愛甲良文教諭（川内小）

研修題目：放送番組を利用した理科学習指導法の研究

*技術・家庭科教育：江田英俊教諭（幟町中）

研修題目：「情報基礎」領域の題材の取り扱いに関する研究

*道徳教育：木川恵子教諭（日浦中）

研修題目：価値の主體的自覚を促す指導過程に関する研究

*特別活動：穂山和也教諭（原小）

研究題目：連帯感を育てる学級集会活動の指導法に関する研究

*離退任

～在任中はお世話になりました～

橋本郁主任指導主事（亀崎中学校教頭へ）

亭里川孝行主任（広島工業高等学校主任へ）

早川慧指導主事（亀山南小学校教諭へ）

加藤良明研修指導員（退職）

山中隆治教育相談員（退職）

石原幸江教育相談員（退職）

*就任

～どうぞよろしく～

畑野孝治主任（市教委学事課から）

吉竹邦昭指導主事（山本小学校から）

三原裕隆指導主事（国泰寺中学校から）

末森一男教育相談員（前江波中学校長）

久保田澄教育相談員（前皆実小学校長）

木戸義明研修指導員（前中広中学校教諭）

職員・分掌

部	事業等	職名	氏名	担当業務
		所長	貞金 明	所務総括
		次長	原田 力	所務管理・執行
管理部	庶務・経理	主任	畑野孝治	部内総括、施設設備の維持・管理
		主事	来海谷恭子	公印、給与、文書処理、経理等
		主事	服部和之	予算、決算、経理等
第一研修部	教育相談・広報	主任指導主事	宮河 治	部内総括、障害児教育、教育相談
		指導主事	升尾好博	特別活動、同和教育、社会教育
		指導主事	長谷川尚徹	生徒指導、教育相談
		指導主事	松田了二	学校教育史編さん
		指導主事	佐々木尚美	幼稚園教育
		指導主事	三原裕隆	生徒指導、教育相談
		指導主事	兼田丸豊生	教育相談
		指導主事	兼嶽野壽正	教育相談
		教育相談員	末森一男	教育相談
		教育相談員	久保田 澄	教育相談
第二研修部	研究・教育資料整備	主任指導主事	福原祐治郎	部内総括、外国語(英語)科
		指導主事	民安和昭	算数科、数学科
		指導主事	松浦克行	教育工学、視聴覚教育
		指導主事	財津伸子	国語科
		指導主事	吉竹邦昭	社会科、道徳
		研修指導員	中田昭吾	教育工学、視聴覚教育
第三研修部	研 修	主任指導主事	中村 道徳	部内総括、企画
		指導主事	竹本建治	家庭科、技術・家庭科
		指導主事	西川勝士	音楽科
		指導主事	西村達男	理科
		指導主事	越智文嗣	図画工作科、美術科
		研修指導員	温田家弘	理科
		研修指導員	木戸義明	家庭科、技術・家庭科

(兼)は兼務

題 字 広島市立中野小学校長 世木田照彦

表紙絵 広島市立五日市観音中学校教頭 高藤 博行

～広島市現代美術館～

ヘンリー・ムーア(イギリス)作「アーチ」

編集後記

本年度最初の所報をお届けします。今回は「教師と子どもの人間関係」について特集しました。教育実践に役立てていただければ幸いです。